

## シンポジウム5 放射線治療医からみた高気圧酸素療法、 日本放射線腫瘍学会からの要望

副島俊典<sup>1)</sup> 丹羽康江<sup>2)</sup> 岸 和史<sup>3)</sup>  
大西 洋<sup>4)</sup>

- |    |            |        |
|----|------------|--------|
| 1) | 兵庫県立がんセンター | 放射線治療科 |
| 2) | 宇治徳洲会病院    | 放射線治療科 |
| 3) | 北斗病院       | 放射線治療科 |
| 4) | 山梨大学       | 放射線科   |

近年の放射線治療は著しい患者の増加と高精度化がキーワードとなっている。患者の増加は、高齢化によるがん罹患患者数の増加・EBMの普及による欧米での放射線治療の適応疾患の日本における普及・薬物療法の進歩により生存期間が延長に伴う緩和照射機会の増加の3点が原因と考えられている。放射線治療患者の増加に伴い、放射線治療による晩期有害事象症例数の増加が懸念されている。放射線治療の高精度化は晩期有害事象の頻度を減ずる方向に向かわせるかもしれないが、一方で処方線量の増加や放射線治療の適応疾患の増加により、晩期有害事象の増加の可能性をはらんでいる。

放射線治療の晩期有害事象に高気圧酸素療法が有効であることは、多くの放射線腫瘍医が教科書や論文などで理解しているが、現実には診療報酬がきわめて低いために高気圧酸素療法を行っている施設が非常に少ないために、結局他治療（放射線直腸炎に対する内視鏡治療など）を行っていることが多いのが現状である。また、放射線腫瘍医に十分な高気圧酸素療法についての教育がなされていないのも事実である。

日本放射線腫瘍学会は前回の保険収載改定の準備段階から日本高気圧環境・潜水医学会と連携して高気圧酸素療法の保険点数の増加の要望を提出しており、一刻も早く適正な保険点数になることに期待している。そのことにより高気圧酸素療法を行う施設が増加し、晩期有害事象発症時に的確な症例を的確な時期に高気圧酸素療法で加療できるようになることを切に要望する。今後とも日本高気圧環境・潜水医学会と連携して高気圧酸素療法の保険点数の増加に努力していきたいと考えている。また、放射線腫瘍医の教育に関し

でも努力していきたいと考えており、日本高気圧環境・潜水医学会の協力を期待している。